

マレーシアにおける日本語既習者の日本語弁論能力の現状と課題

前ペナン日本人学校 教諭

岐阜県高山市立丹生川中学校 教諭 中 坂 大 輔

キーワード：マレーシア、日本語教育、日本語弁論大会、日本語スピーチコンテスト

1. はじめに

多民族国家マレーシアにおいては、政治・行政的な基準によって人種分類化されるブミプトラ（先住民、マレー人など）と非ブミプトラ（中国人、インド人など）に大きく分けられ、ブミプトラを優遇する政策が採られている。公用語としてマレー語が位置づけられているが、その他にも多様な言語が社会で幅を利かせている。このようなマレーシアにおいて、どのようにして日本語教育が進められてきたか、調査をした。

2. マレーシアにおける日本語教育

(1) 太平洋戦争の時期

マレーシアにおける日本語教育の流れは、第二次世界大戦中の日本軍政下の言語政策から始まっている。この時期の日本語教育は強制的に行われていた。日本軍支配下での日本語教育は、日本精神を植え付け、多民族を日本人化しようとする同化政策の手段として実施されていた。なお、この時代の日本語教育により、後のマレーシア国内での日本語教育のパイオニアが育ったのも事実である。

(2) 戦後から 1980 年代にかけて

戦後の時期は日本軍統治の反動もあり、国語であるマレー語教育が重視され、日本語教育は姿を消している。なお、当時は英語教育ですらも軽視されていた。

1957年にマレーシアが国家として独立した後、日本は直ぐにマレーシアを国家として承認し、外交関係を樹立した。1960年代から80年代にかけて、日本の高度経済成長期時代は、日系企業の東南アジア進出が増え、日系企業に勤める人たちの間では、出世のために日本語を学習しようとする機運が高まった。各大学で日本語教育が始まり、民間教育では、1968年にマレーシア日本語協会が創立。ペナンでも、1982年にペナン日本語協会が創立している。

(3) 東方政策以降

1982年に開始された「東方政策」の一環として、1万人を超える国費マレーシア人留学生や研修生が日本での研修、留学を実現するなど、日本語教育に大きな影響を与えた。現在も、毎年300人が留学生としてマレーシアから日本へ渡っている。マラヤ大学で物理や化学など理系を専攻する学生が主である。東方政策以降のマレーシアの日本語教育は、主として政府主導で進められてきたという特色がある。

また、マレーシア国内には現在約3万5000人の日本語学習者がいると言われているが、その半分以上が中高生である。マレーシアの中等教育機関で日本語教育が開始されたのは1984年で、今年で35年になる。当初は全寮制中等高等学校でのみ日本語教育が行われていたが、現在では、一般の普通学校においても日本語教育が行われている。当初の中等教育における日本語教育については、日本語は第二外国語として位置づけられ、学生は1年時に自分の希望する外国語を1つ選択し、その言語を4年間学習することになっていた。第二外国語としては、他にはアラビア語、フランス語、ドイツ語、中国語などがあったが、学校間で開設言語の種類は異なっていた。現在は一般学校でも日本語教育が行われているため、すそ野が広がっているが、学習者を民族別に見た場合、マレー系が多いと言われている。日本語クラスを開設している学校は、全国に約130校あり、年間60時間学習をしてい

る。ただし、正規のカリキュラムとして扱われる学校、課外学習として設置されている学校と、日本語教育の位置づけは一樣ではない。

ペナン日本人学校と交流がある SMK Bukit Janbul（ブキツジャンブル）校では、2018年の場合日本語を履修している学生は、1年29人、2年13人、3年16人、4年4人、計62名であった。この学校では、日本語は課外学習として位置づけられているが、日本語学習を希望する者が多く、2019年は、さらに学習希望者が増える見通しである。そこで、日本人スタッフが派遣されるなど、これまで以上の支援を必要としている。なお、学習者の動機は、アニメ、漫画を理由とするものの他に、親の勧めがある。

表 マレーシアにおける日本語教育機関・教師数・学習者数

	初等中等教育			高等教育			学校教育以外			総計					
	1998年	2003年	2015年	1998年	2003年	2015年	1998年	2003年	2015年	1998年	2003年	2006年	2009年	2012年	2015年
機関数	30	37	—	16	22	—	68	71	—	114	130	142	124	196	176
教師数	56	66	—	87	132	—	176	214	—	319	412	437	388	509	430
学習者数	2564	5562	17450	2892	6472	12442	3763	5372	3332	9219	17406	22920	22856	33077	33224

上記の表は、国際交流基金による調査結果をまとめたものである。日本語教師の養成のためにマレーシア教育省が実施していた日本留学プログラムや国内研修プログラムが終了、中断しているため、調査年によって機関数と教師数には増減が見られるが、日本語学習者の数は増え続ける傾向にある。2015年人口10万人あたりの日本語学習者は110人で、世界第18位となっている。

3. 調査概要

第37回ペナン日本語弁論大会（平成28年度開催）、第38回ペナン日本語弁論大会（平成29年度開催）、第39回ペナン日本語スピーチコンテスト（平成30年度開催）を参観し、日本語既習者の日本語能力を調査した。なお、第37及び第39回大会の中では質問者として参与する機会を頂き、大会出場者と直接関わる機会があった。本大会は、在ペナン日本国総領事館、国際交流基金、ペナン日本語協会、ペナン日本人会との共催事業として開催されている。

日本語学習の意欲の維持と日本への理解促進を働き掛ける目的で行われている大会であるが、第37回大会までは地方大会の位置づけも兼ねており、「一般の部」上位入賞3名がマレーシアの首都クアラルンプールでの全国大会出場権を獲得し、全国大会上位入賞者は日本への研修旅行の権利を獲得することができていた。

第38回大会からは全国大会がなくなったこともあり、地方大会の意味合いはなくなった。そのため、第38回大会は大会運営の仕方自体を模索し、「学生の部」に限っての開催であった。

第39回大会からは、再び「学生の部」、「一般の部」の2部門での開催であった。会の目的も、日本語学習意欲のさらなる向上を図ること、日本語への関心を高めるきっかけとすることなど、日本語教育の推進に寄与することであることを確認し、マレーシア国籍を有し、マレーシア北部6州（ペナン州、ペルリス州、ケダ州、ペラ州、クランタン州、トレンガヌ州）のいずれかの州に居住している者、母国語が日本語でない者、両親のいずれかが日本国籍でない者に参加資格があるとされた。以下、第39回大会に絞って、調査概要を記述する。

4. 第39回大会の調査概要

(1) 調査内容

マレーシア、ペナン州で開催された「第39回 ペナン日本語スピーチコンテスト」に同席し、現地の日本語既習者がどの程度日本語で話すことができるか、また、何に興味をもっているのかを、弁論大会での弁論内容及び弁論原稿を基に調査した。

この年は、平成28年度と同じく「学生の部」、「一般の部」の2カテゴリーでの開催であった。スピーチ後に、

質問者より日本語にて発表者に質問がなされた。そのやり取りを見ることで、発表者がどの程度まで日本語を理解し、話せていたかも併せて調査した。

(2) 「学生の部」調査結果

「学生の部」出場者は、事前に応募のあった12名から書類選考で選ばれた8名が出場している。ただし、1名の欠席があり、当日は7名で行われた。なお、在ペナン日本国総領事館文化担当領事による書類選考は、「読みたい原稿かどうか」という観点で選考がなされている。原稿内容は、なぜ日本語を勉強するのかという動機に関わるもの、家族に関わるものが多かったようである。なお、前者について、書類選考時にはアニメや漫画に関する原稿が見られたが、それらは本選時の発表では1つも見られなかった。

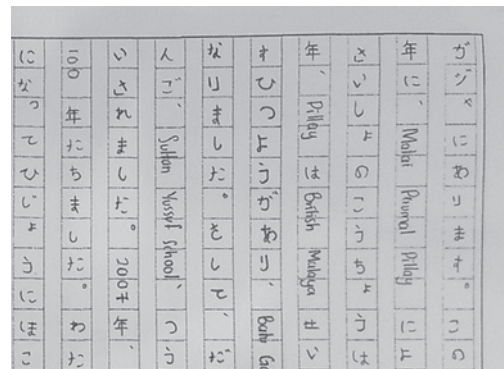


コンテストのポスター

発表及び質疑応答を含めた出場者の全体的な印象として、過去2回より日本語弁論能力が低いように思われた。その理由として考えられるのが、本コンテスト前の週5月9日にマレーシア国内選挙が行われ、その結果から水、木、金曜日が急きょ国民の祝日3連休になったことが挙げられる。マレーシアでは、選挙は地元で行わなければならないため、選挙日当日は主要道路が混雑する。そこで、平日水曜日を祝日にし、国民が移動しやすくなったのである。なお、ペナン日本人学校も地域住民の投票所に指定されたため、選挙日前日は授業が半日になり、選挙日当日は終日休校となった。また、今回の選挙では、マレーシア史上初めての政権交代が起こっている。野党勝利を受け、選挙日翌日10日木曜日、翌々日11日金曜日にも急きょの祝日となることが決定されたのである。そのため、指導者の教員、出場者の生徒達は学校での追い込みの機会を失い、例年ほどの完成度が見られなかったのであろうと推察される。

日本語クラスが開校されており、日本語教員の指導のもと、日本語学習を続けてきた者たちの出場が多い中で目を引いたのが、独学での日本語学習者であった。審査員5名による審査点合計点が高く、発音、イントネーションも日本人かと間違えるほどであり、発表、質疑応答もとても流暢であった。弁論能力は7人の中で群を抜いているにも関わらず、誰かから指導を受けている訳ではないのである。本人によると自宅でインターネットの動画等を通じて学習しているとのことである。

スピーチとそれに続く質疑応答では母語話者並と感じた日本語能力であるが、出場者のスピーチ原稿から、確かに指導者による指導がなかったことが見てとれた。原稿はあらかじめ指定された縦書き原稿用紙に日本語で記述し、提出することになっている。生徒達は自分の学校の日本語教員たちに事前指導を受けてから提出しているのであろう、日本語記述のてにをはがある程度守られた原稿が多い。ところが、この出場者は、原稿が左から右に向かって書かれていたり、読点が行の最初に書かれていたりするのである。おそらく、この原稿は執筆後誰かに添削されることなく提出したのであろう。話し言葉としての日本語は流暢であっても、書き言葉としての日本語となると、指導の有無によって大きな差が見られるのであった。



日本語独学者のスピーチ原稿

(3) 「一般の部」調査結果

「一般の部」出場者は、事前に応募のあった12名から書類選考で選ばれた7名が出場している。

スピーチコンテストの会場であった、Universiti Sains Malaysia (略称、USM) の学生の出場が目立った。また、日本語学習期間が短いにもかかわらず、学生の部と比べて、発音がとても流暢な者が多かった。USMはマレーシアで2番目に設立された大学を前身としており、理系を専攻する学生が多く所属している総合国立大学である。日本語を履修する学生も、多くは理系学部の子生である。Top Universities in Malaysiaによれば、USMはマレーシ

ア国内大学の第3位に位置付けられている。能力の高い学生が多く在籍しており、日本語学習においても、その高い理解力がいかんなく発揮されているように思われる。

一般の部でも、質問者は、2つの質問を行った。1問目は Yes / No で答えられる簡単なもので、語尾を「ね」で統一したこと、2問目を「何の」や「どんな」など、答えが多様になるものとしたことは学生の部と同じである。学生の部と比べて、質問に対してしっかりと回答している者が多かった。日本語学習期間が短いにも関わらず、十分に能力が身につけていることが見てとれた。日本語母語話者同士の会話レベルと思われる出場者も2名いた。日本語能力試験に合格している者が多いこともあるが、書き言葉については、ある程度の漢字を使って原稿が書かれている。また、学生の部と共通することに、独学者の原稿の使い方の間違いも見受けられた。

また、おそらくこれは日本語学習の動機となったものと関連していると考えられることだが、7名中4名がスピーチ内容もしくは質疑応答の中で、アニメや漫画に関連することに触れていた。例えば、最も得点の高かった発表者は、自然の尊さやマレーシア内の河川の大切さを主張した。そのスピーチの最後を以下の言葉で締めくくっている。

「土に根をおろし、風と共に生きよう。種と共に冬を越え、鳥と共に春をうたおう。どんなにかい建物を持って、たくさん武器や技術を持って、土から離れては生きられないんです。皆さん、どうか、一緒に自然を護って、私達の未来を護ってください。」(原文まま)

有名なジブリ映画の一小節からの引用である。音声は日本語で何度も観たのであろう、とても流暢に話していた。学生の部の出場者たちにも見られたことであるが、日本語を学習しようとする動機として、アニメや漫画の影響力が強いと見てとれる。

5. おわりに

東方政策以降は、経済的動機で日本語を学習しようとする者がいた。しかし、近年では、漫画やアニメ、ゲーム、映画、音楽、和食などの日本文化に関心を頂き、日本語を学習する者が多いと聞く。実際、今回の弁論大会やスピーチコンテストでも、その傾向は見て取れた。日本の漫画やアニメが異常な熱意で受け入れられ、それらの影響によって日本文化に関心を寄せ、日本語学習を始めた人は少なくないと思われる。

マレーシア教育省によると、1年生の学習時間数は年間64時間である。この時数では、言語を十分に身につけるには心許ないことが容易に想像される。さらに、1年生用の教科書である『日本語 BAHASA JEPUN』は、文法問題文型練習が全練習問題の半数以上を占めており、コミュニケーションな会話や聞き取り問題などを大きく上回っている。日本語の知識を理解するための、伝統的なアプローチが重視されているのである。

2017年1月入学の1年生より新シラバス (Kurikulum dan Standrd Sekolah Menengah) が施行され、施行後の5年間でこの新シラバスが全学年へと適用されていく。マレーシアの日本語学習者にどのような影響があるのか、今後の動向が気になるところである。

参考資料

- ・国際交流基金『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査』1998、2003、2006、2009、2012、2015年
- ・葉蕙 (2010) 「マレーシアにおける日本文化」『立命館言語文化研究』21巻3号
- ・三浦多佳史 (2017) 「東南アジア3か国における、中等教育段階の日本語教育に関する一考察 ―現在使われている中東教育用教科書の比較から―」第14回マレーシア日本語教育国際研究発表会 ポスター発表